

平成21年 5月29日現在

研究種目：若手研究（A）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18683007
 研究課題名（和文）伝統技術の伝承と産学連携を融合した教育者育成プログラムの構築
 研究課題名（英文）Construction of Educator Promotion Program that Unites Legend of Examples of Traditional Craftsmanship with Industry-Academia Collaboration.
 研究代表者
 松久 公嗣（MATSUHISA KOJI）
 福岡教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：00380379

研究成果の概要：「表装」という伝統技術の伝承形態を調査するとともに美術系企業との連携を進め、職人的社会や企業における人材育成システムを検証し教員養成に展開可能なノウハウの収集を行った。さらに社会が求める即戦力としての教育者育成プログラム構築にむけて、被験者となる学生の実践とその検証を繰り返した。各実践を通して大学教員・現職教員等との比較を行い、学生との差異をビデオ映像で比較検討してプログラムに反映させた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総計	6,200,000	1,860,000	8,060,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：図画工作，美術，伝統技術の伝承，表装，掛け軸

1. 研究開始当初の背景

幼児教育にあつては、レグジョ・エミリア・アプローチ（Reggio Emilia Approach）とその保育者の一員であるアトリエリスタ（Atelierista）のように、芸術及び芸術専門家の役割が非常に評価されているにも関わらず、初等教育ならびに中等教育の現場においては、学年が進むにつれてその評価が低下し、時間配分や環境の劣化が起きているのは何故なのか。その要因として、小学校においては美術の専科を修めた教員が少ないという現状とそれに対する危機感の欠如、ならびに各教科の相互性の不足が挙げられる。

結果として、効果的な造形遊びが行われず、教員の苦手意識が子供に伝染することとなっている。幼児教育を踏まえた初等教育の展開が教員個々の資質に委ねられ、教科研究会による一部改善は行われているが、組織的な教育指導者の育成を行うには至っていない。その延長線上にある中学校では、美術の専科を修めた教育者は多数存在するが、小学校で染み付いた苦手意識を払拭する授業の必要性に拘束され、本来あるべき美術教科としての技術・能力育成が後回しとなっている。その為、カリキュラムに対する実践的な評価の低下を招いているのは事実である。また、感

性の評価に関しては、多種の評価基準の作成が試みられているが、習熟度の伸びや個性の評価を数値化するのには困難で、生涯学習の立場に立った長いスパンの評価基準の作成とそれに関わるデータ収集が必要である。さらに根本的な問題を解消する為には、美術に関する知識と適格な技術を備えた教育者の育成が必要であり、それと同時に教育者養成プログラムの構築と実践を行う為のカリキュラムの整備が欠かせない。さらに、現在指導に当たっている教員に対する指導方法の確立と、実践的な評価体制の構築が不可欠であると考へた。

研究者はこれまで、伝統技術の一つである表装について、美術・書道教育への導入ならびに教材への展開に着目し、技術伝承のマニュアル化、学校教育における教材としての可能性、指導者の育成及び指導方法の確立について研究を進めてきた。これは、研究者の表装・額装製造及び販売業の企業勤務経験を活かしたものであり、企業価値を高める根幹である社員教育について、自ら企画・運営したノウハウを高等教育に活用したもので、本研究の基盤研究に当たる。学校教育・生涯教育・社員教育それぞれの専門的な見地から連携・交流は行われているが、総合的に連動させた人材育成システムの構築は例が無く、本研究は伝統技術の修得過程に見られる問題点を解決する中で、個人の資質に委ねられることの多い指導・教育について実践的な改善方法を提言する点において独創的な視点を持つ。主たる目的は、図画・工作及び美術科を中心とした学校教育の改善であるが、企業内の社員教育、社会一般の生涯教育、適格な技術と多様性を有する教育者の輩出及び技術指導カリキュラムの構築と展開において、実践的に働きかける質の高い手法を提案できる点で、その意義は非常に大きいと考えられる。

2. 研究の目的

本研究においては、教育システム及び人材育成プログラムの構築を美術関連企業内において実践・検証することでマネジメント効果を検証し、教育の現場での展開に現実的な内容を盛り込む点を重要視している。また、産学連携を進展させることで、企業における教育指導者の確立と育成といった、教育系単科大学の存在意義と需要に関して研究を深めるものであり、教育大学の特色あるプログラムとして展開し、個性ある有能な教育担当者輩出の拡大に結びつけることが可能である。なお且つ収集したデータと経験を学校教育界にフィードバックさせることで、マネジメント感覚と多視点からの考察能力を有した教員の輩出が期待できる。企業の立場から人材育成の重要性を研究・実践するもの

は多く、ビジネスとして専門知識や技術を備えた人材派遣の活用が盛んに行われている。現場が主体性を取り戻す為には核人材の登用・育成が重要であることは、教育の現場にあっても認識されているが、その実践的なカリキュラムとシステムを持たない。

研究者は2004年度着任より、教育大学の特質を活かした人材育成について独自の視点から研究を進め、伝統技術をキーワードにマネジメント能力を有した教員の輩出を狙った科目開設の準備を行ってきた。同時に鑑賞授業を中心とした近隣小・中学校・附属学校・園での実践を通して、教育現場の実体と芸術専門家の必要性を確認した。また、自身が企画・運営した社員教育システムの展開と連動させる為には企業との連携強化を図っている。授業でのシミュレーションと学生・研究補助者及び社員（又はパートタイマー）による修得過程のデータ集積を行い、各現場に即した実践的でわかりやすいシステムを構築する。これは教育学界の要望に応えるもので、なお且つ多方面への展開が可能な斬新な視点に立った研究といえる。

3. 研究の方法

教育大学の特質と環境を最大限に活用し、4人程度の学生を対象とした指導者育成の過程についてデータの集積を行い、問題点を明らかにしながら、学校教育と企業内教育の長所を作用させたカリキュラムを以下の観点に基づいて作成していく。

(1) 企業における技術教育者のあり方と教育カリキュラムの構築

美術関連の加工・販売業において、社員教育のシステム構築に参画することでデータの共有を図り、インターンシップ等による現場実践を行う。

(2) 指導者育成と技術伝承のマニュアル化

企業のノウハウを学校教育へと展開する。本研究では伝統技術を中心として、学校教育の教員に求められる技術とその育成方法を探りマニュアル化を目指す。

(3) 大学における教育の充実と連携の強化

新規開講予定の授業において、効果的なカリキュラムとして実施する方法を探り、企業のみならず博物館・美術館との連携を活かした実習の充実を図る。

(4) 現職教員への教育の可能性について

現職教員に対する補充的な技術教育について、カリキュラムの作成と整備体制に関する問題点の解消を図る。

4. 研究成果

上記研究方法に準じた実践を行い、各事例を集約・検証・改善するなかで、マニュアルならびにカリキュラムの整備を行い、教育者育成プログラムとして機能するよう整理し

た。科研プロジェクトとして終了後も、各実践の継続が可能なように配慮しており、平成21年度も各学校・教育施設での実践を予定している。プロジェクトスタッフとして本研究に関わった学生は、ここでの実践力の修得を活かした教育職ならびに美術館職員、企業における即戦力として活躍しており、今後の成長を記録することで研究の可能性と課題の抽出を継続できるだろう。また、当初の予定通り、一定のマニュアル化を促進し、経験知とも言える教育の体験に基づいた実践スキルを明示したことは、各学校における教育技術伝承の問題に関して、一つの方法論を提示できたものと考えられる。

(1) 連携企業における人材育成システムの検証

茨城県に本社を置く(株)ホンダ産業と連携し、本社製作部：額装・表装工房及び店舗の一つであるJOYFUL-2新潟店において、企業の人材育成システムの現状を調査・検証した。企業におけるスキル評価を学校教育や大学の授業評価に応用する為、詳細な項目を変換し数値化することで、評価者の差異によるブレを減少するよう心掛けた。

① 企業における人材育成の現状分析

日常業務に対する教育活動の割合を計測し、職場の動線や視線の配り方、同僚や上司とのコミュニケーションを量と質で分析した。スキルアップの差異を個人の資質と絡めて考察する。企業で作成しているスキル評価の項目と評価結果の関係について分析を行い、その妥当性を検討し問題点を抽出する。

② 原価計算ソフトの作成

後述する新規開設科目「表装演習」での授業評価やアンケート結果を反映して、表装の原価管理ソフトを作成した。ものが作られる際の原価や仕事量に対する感覚を養い、効果的な教材開発を行う志向性を育成するものである。また、企業の運用と連動することで、学内にあってもインターンシップと同様の企業体験が可能となる。平成19年度から専属の学生を配し、連携企業内での運用に合わせて資料の交換とソフトの改善を行った。

(2) 指導者育成と技術伝承のマニュアル化

① 保存修復の専門家による講習会の開催

学生に対する指導内容を検討することで、教育的な技術伝承のマニュアル化について方向性を確認した。企業での教育担当者や学校教員による指導風景を撮影したものと、伝統工芸師（職人）による技術指導方法及び人材育成コンサルタントによる指導方法を比較検討し、それぞれの長所を融合した教育的な技術伝承のあり方をまとめた。わかりやすさを重視し、なお且つ教育の現場に即した柔軟性を加味した。

② 大学院生との共同研究ならびに教育実践力の育成・検証

本学大学院に在籍する学生に対して役割を課し、それぞれの教育実践力を育成するとともに意見の集約を行った。その成果は、『伝統技術の教材化—表装技術を活用した授業実践にみる教育者育成の可能性について—』と題して大学紀要にて発表した。以下のその概要を示す。

(a) 中学校での授業実践に関する教材研究・実践（折居英彦）

表装技術を教材化するうえで、基礎的な技術の習得を目指し、伝統素材に触れることを重視してきたが、実践者と評価者の反省にあるように、予想を超えて生徒の基礎技術力は低かった。これは、本稿の仮説に該当することでは妥当であるが、教育上は問題である。カリキュラムを作成する場合、ある程度の反復練習の必要性を予測していたが、一定の技術力を備えている生徒とそうでない生徒の差が激しいと、一斉授業を想定している現在の美術科指導案では限界がある。当初より、机間巡視を中心に、複数の指導者によるOJTの導入を検討したが、習熟度別授業の観点にまで踏み込まなくては解決できないものなのか、今後の実践に大きな課題を残すこととなった。

(b) 実践に関する指導・評価（山本由紀）

教材開発を協同で行うことによるメリットは、教員の負担軽減が目的でなく、教室で実践しなければ分からない生徒の動きや、習得能力の程度が実感できる点にある。理想的な指導案とは、各学校の各教室において、臨機応変に変更が可能でありながら、その目的にブレが生じない指導案である。基となるデータを実践結果から得ることで、応用力のある指導案の作成が可能となり、教員の資質やスキルに関係なく、的確な指導を行えるものとなりうる。次に、指導する教員のスキルを高めるための技術力育成の機会を大学が中心となって提供することが可能となる。教師のリーダーシップが求められ、教員評価の体制が整備されるなか、教員の本来的職務であるティーチングスキルの成長を学校教育がいかに保証していけるかが重要な問題となる。教育大学と各学校・教育委員会が協同で種々の問題に対峙し、個々の教員のスキルに合わせた研修及び実践機会の提供を行わなければならない。同時に、一定量マニュアル化されたプログラムを確立し、育成プログラムとして明示することで、教員のモチベーションを高め、正当な評価を受ける基盤を整備する必要がある。一定の評価が異なった学校でも通用するわけではないが、感性に頼った不確実な評価が通用する時代では無くなってきている。

(c) 表装する作品の制作と展示に関する考察ならびに教材化にあたる効果と課題の検証（香月秀子）、学生食堂での展示作品への

展開に関する表装案の提示及び製作（折居英彦）

作品を表装することで生まれたメリットについて考察する。鑑賞に関連して、日常生活に美を求める態度を育てることが本研究の重要課題であった。これは、いつもと違う体験という新鮮さが手伝って、ある程度の反応を得たようである。しかし、教材には常にマンネリ化が問題となってくる。当然授業を受ける生徒は毎年新鮮な気持ちで教材に対する訳だが、学校を中心とした作品展示について見慣れてしまったときに、同じ反応をもって迎え入れられる教材であるかが重要である。来年になったらあんな作品が制作できると期待を持って作品制作に向かえることが出来るほどの魅力を有したものでなければいけない。その点では、折居と香月が行った色彩を加味した実践にその可能性を強く感じた。作品と表装の組み合わせにデザイン教育を交えて指導することで、個性や感性を刺激しつつ基礎を学ぶことの出来る教材開発が見込まれる。材料提供の方法と、作品となる題材設定の幅を広げることを検討し、提案できる教材の数を増やしていくことが必要である。

(3) 大学における教育の充実と連携の強化
① 新規授業「表装演習」開講とカリキュラムの整備

表装技術の習得とマネジメント意識の向上を目的とした授業を新設し、連携企業から提供された資料に基づいて、現実的な実践教育を展開した。九州国立博物館ミュージアムショップとも連携して、マーケティングリサーチや企画・製作・プレゼンテーションを課題として、実践的な能力の育成を図った。

② 九州国立博物館との連携

(a) 「あじっば」における“BOXキット”作成およびワークショップに向けた実践

九州国立博物館交流課と連携して、子どもを対象とした施設「あじっば」で展開されている“BOXキット”に着目し、「針聞書掛け軸BOXキット」の提案・作成・納品を完了した。子どもや保護者の反応を体感する場と位置付け、実際にキットを用いて指導することで、ワークショップ当日に予想される問題点の抽出を行った。

(b) ボランティアスタッフに対する研修会

生涯学習の観点に立った研修方法について、意見や資料を収集することができた。キットに対する不信感や疑問を事前に解消し、共通認識を持って実践に臨むことで、マニュアルに対する理解度が増した。ボランティアスタッフもワークショップ当日は交代で子どもたちの個別指導にあたるが、事前に制作することで、大人同様に子どもたちがつまづく箇所と内容を経験をしておき、その体験が臨場感のある指導として効果的に機能して

いた。さらに、交流課職員の意見を基に改善を行った。

(c) ワークショップ『つくってみよう☆わたしの掛け軸』実践

第1回 8月4日（土）10:00～12:00 13名

第2回 8月4日（土）14:00～16:00 8名

第3回 8月5日（日）10:00～12:00 19名

第4回 8月5日（日）14:00～16:00 24名

場所：九州国立博物館1階研修室

参加費：無料

定員：各回とも先着30名

対象：小・中学生

- ・第1回は教員担当回
- ・第2・第3・第4回はプロジェクトスタッフ担当回
- ・指導者、個別指導補助者、記録者、受付担当者等の役割を分担し、それぞれの活動内容を映像で記録した

学生が主体となって、現実的な場と予算を設定したワークショップの企画・開発を行い、博物館担当者と実践に向けた協議を繰り返すことで、より社会的かつ実践的な教育力育成の機会とした。大学教員は補助的な役割を担い、学生が成長する過程を記録し、実践内容を比較分析することで、効果的な教材開発と実践方法の改善を行った。プロジェクトスタッフも受講者に対する指導者という立場に立つことから、教育者との比較を行うことで、教育者の特性が抽出できた。

この実践によってプロジェクトスタッフの一員である学生が、習得できたと考える能力は以下の通りである。

- 自らの提案が採択され、関係者を説得し理解を得ていくまでに必要な企画・実践力
- 作業分担、作業計画など、組織として案件を処理する上で得た、問題提起と現実的な改善策を提案できる能力
- 企画・運営に必要なコストや経費を把握し管理することによって得た、行政経営能力
- プロジェクトメンバー、ボランティアの学生同士で連帯感を深めることで得た、社会的なコミュニケーション能力と責任能力
- 幅広い年齢層の子どもに対する指導で得た、子どもの豊かな感性を体感し伸ばすことのできる教育実践力
- 保護者やボランティアスタッフへの指導で得た、保護者とのコミュニケーションを図り、家庭や地域が抱える問題を把握する洞察力
- 学校以外での、生涯学習に関する企画提案・指導能力

実際に、九州国立博物館担当者（高校の教師でもある）からも高い評価を得た。実践後の反省会でも、学生スタッフ一同、充実した達成感を得ることができ、上記内容と同じく、自身の教育実践力の向上を実感していた。プロジェクトスタッフを中心に補助スタッフ

の輪が拡がり、ワークショップの成功に繋がったことは特筆に値する。

(4) 現職教員への教育の可能性について

① 赤間小学校での実践

近隣小中学校との連携を強化する大学のプログラムに連動して、小学校において掛け軸製作の可能性を検証する実践を行った。当初は高等学校を中心に展開する予定であったが、小学校において実践することで、教師の専門スキルの育成や図画工作に対する関心の度合いなど、重要な課題が抽出された。宗像市立赤間小学校6年生の卒業記念制作として『色々な私 未来を夢みて』と題材を設定し、スチレン版画による自画像制作と、その作品を掛け軸に仕立てるという内容を指導した。単なる「出前授業」ではなく、小学校の現職教員と大学教員、学生が協働して授業を創り出すことを目的とする。現職教員と大学教員、大学生を交えた研修会を必要に応じて開催し、現職教員が担当する授業回を設定すると同時に、専門的な技能と知識の強化を図る。特殊な機材や用具の充実ならびに専門技術の指導を教育大学が担うことで、ともに学ぶことのできる教育の場を整備するものである。この実践は科研プロジェクト終了後も継続する予定であり、カリキュラム及び指導案等が他の学校においても実現可能なものへと改善を進めている。この実践における観点は以下の通りである。

(a) 小学校図画工作科に有効な教材の開発

(b) 新たな教材による児童の学びの強化（感性と基礎技能の育成および鑑賞の融合）

(c) 教育大学の学生による教材開発および授業実践力の強化

(d) 教育大学教員による教材開発および学生指導力の強化

(e) 現職教員の図画工作科指導力の向上

学生に対して、具体的な環境を設定して教材開発を促すことで、より実践的な研究実習を行うことが可能となる。学部生には授業補助に必要なスキルを研修会において事前に学習させ、客観的な立場から児童の姿や指導者の指導方法などを習得する機会とした。また、担任教諭に対しても、チームティーチングとは異なり、主として指導する回を除いては、学部生に近い立場での指導および補助を依頼した。これは、大学教員による指導方法を客観的に把握し反省と改善を繰り返すことで、教材研究を高いレベルで展開し指導力の強化を図るためである。さらに、赤間小学校のようなマンモス校では図工室を使用する頻度が少なく、図工室で授業を行うことによって環境が変化し、児童間のコミュニケーション体系が教室と異なる点で、普段とは違った児童の姿を観ることができるといったことにより、通常の指導に関しても新たな視点が加わることとなった。

(5) 学会発表

① 学生による実践報告

各学会において研究の成果を学生自らが発表し、その変遷を記録・検証することで学習の履歴をまとめた。教育実践力ならびに教育スキル向上の度合いを検証し、カリキュラム・プログラムの成果を評価する基準とした。

○ 折居英彦，伝統文化の教材化－表装技術を活かした実践と応用－（中学校），第45回大学美術教育学会新潟大会，2006年9月2日，新潟大学

○ 峰松由布子，ワークショップ『つくってみよう☆わたしの掛け軸』実践報告，平成20年度日本教育大学協会研究集会ポスターセッション，2008年10月25日，三重大学

○ 教育現場での実践に関する学生参加のあり方について，平成20年度日本教育大学協会研究集会，2008年10月25日，三重大学

② 研究成果の発表・評価

本研究のまとめとして各学会においてその成果を発表し、成果に対する客観的評価を得た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 松久公嗣，掛け軸を応用した実践にみる教育者育成の可能性－伝統技術の伝承と産学連携を融合した教育者育成プログラムの構築－，大学美術教育学会誌，41号，301-308頁，2009年，査読有

② 松久公嗣，折居英彦，山本由紀，香月秀子，伝統技術の教材化－表装技術を活用した授業実践にみる教育者育成の可能性について－，福岡教育大学紀要，第56号第5分冊，89-106頁，2007年，査読無

〔学会発表〕（計3件）

① 松久公嗣，伝統技術の伝承と産学連携を融合した教育者育成プログラムの構築，第47回大学美術教育学会高知大会，2008年11月3日，高知大学

② 松久公嗣，峰松由布子，地域の小学校との連携にみる教育大学の役割について，平成20年度日本教育大学協会研究集会，2008年10月25日，三重大学

③ 松久公嗣，伝統技術の伝承と産学連携を融合した教育者育成プログラムの構築，第45回大学美術教育学会新潟大会，2006年9月2日，新潟大学

〔その他〕

・「表装 原価計算ソフト」2007年度

・成果事例：「福岡教育大学学術情報リポジ

トリ」
<http://libir.fukuoka-edu.ac.jp/dspace/handle/123456789/220/browse-title>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松久 公嗣 (MATSUHISA KOJI)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：00380379

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：